原 著 歯周疾患の統計的観察

1. 主訴からみた患者の実態について

佐々木 隆 博, 鈴木 英 夫, 松 丸 健三郎
岩手医科大学歯学部保存歯周病学教室
(指導 上野和之助教授)

THE STATISTICAL STUDIES ON PERIODONTAL DISEASE

1. The frequency of the patients with oral symptoms suggestive of periodontal disease during a 4-year period

Takahiro SASAKI, Hideo SUZUKI and Kensaburo MATSUMARU

Department of Periodontology, Iwate Medical University School of Dentistry, Morioka
(Director : Kazuyuki Ueno)

Summary

1) Patients who had symptoms due to periodontal disease, as motive of the first Dental visits, showed lower percentage of 9.6 in 1967, 9.0 in 1968, 8.6 in 1969 and 7.6 in 1970 of total dental patients.

2) Although the ratio of female to male was about 1.2, the proportions of patients with symptoms due to periodontal disease to total dental patients was somewhat higher in male group than in female one.

3) A large number of patients with symptoms was visited in January, February, June and September compared with the other Months. However, relation between seasons and attack of periodontal disease was not analyzed from our examination especially.

4) Tooth movement, gingival swelling, gingival bleeding and periodontal pain were four main complaints in the present study, and these showed not less than 60 per cent of total symptoms.

5) Gingival bleeding was more prominent in the third decade, gingival swelling in the fourth and tooth movement in the fifth. However, periodontal pain was widely distributed in any generations.

6) There was no apparent sex difference in the symptoms except for tooth movement, pus discharge and hypersensitivity.

7) Patients with symptoms were most highly ranged in two decades of third and fourth, and they occupied not less than a half of patients in the other decades. There was highest distribution of females in the third decade and males in the fourth.

歯周疾患はう蝕と並んで歯科領域における2大疾患とされており、成人におけるその発現頻度は100%に近いという記載もみられる¹⁾。しかしながら、歯周疾患は、う蝕のように歯そのものに形態の異常を示すことや直接疼痛を示すことが比較的少ないため、実際の診療面にあたっては、他の治療中に歯科医によって疾患を指摘されることが多く、歯周疾患による症状を主訴として来院する例は一般に少ないのが現実である²⁾。近年、マスコミの発達により予防歯科の思想や口腔衛生思想が一般の人々にも解され、歯周疾患に対する認識も少しずつ変わってきたとは言え、歯科医の門戸を叩き難い疾患の1つであることには変りはないようである。

歯周疾患による病変の形態面、機能面の十分な改善は、治療開始の時期によっても左右されるものであり、患者がこの疾患を理解し、症状が軽度のうちに歯科医を来訪することは、重要な意味を有する。

我々は歯周疾患の統計的観察を試みたが、今回は歯科外来に受診する患者の動機のうち、歯周疾患によるものの割合がどの程度であるかまたそれが経年的にどのような変化を示しているかについて調査した。

資料及び研究方法

昭和42年4月から46年3月までの4年間に、岩手医科大学歯学部附属病院を訪れた外来患者の記録から初診時の診断、及び診療内容を参考とした上で、歯周疾患による症状を主訴として来院したと判定された患者（以後主訴患者と略称する。）を抽出し、これを調査資料とした。

この資料から、各年度の新来患者に対する主訴患者の比率、および男女別比率、主訴患者の月別変動、歯周疾患の各主訴の年度別割合と男女比、主訴患者の年齢構

表1 新来患者中の主訴患者の年度・男女別比率

	42	43	44	45
新来患者	5860	6149	5797	6215
男	(2585)	(2695)	(2496)	(2705)
女	(3275)	(3454)	(3301)	(3510)
主訴患者	559	552	501	483
男	(254)	(258)	(218)	(226)
女	(305)	(294)	(283)	(257)
比率(%)	9.6	9.0	8.6	8.9
男	(9.8)	(9.5)	(8.7)	(8.2)
女	(9.4)	(8.5)	(8.5)	(7.4)

成、年齢からみた男女差等について調査を行なった。

結 果

1) 主訴患者数とその比率(表1)

主訴患者の比率は、42年度の9.6%から漸次減少の傾向にある。また主訴患者についてみると、各年度とも女性が多く53.4~56.5%となっているが、新来患者総数についても女性が多く55.8~56.9%となっているため、男女別にそれぞれ主訴患者の比率をみるとむしろ男性の方が多い傾向にある。

2) 月別の主訴患者数(図1)

図1 月別の主訴患者数

図2 各主訴の年度別比率

年度による多少の変化はあるが、一般に 6, 9, 1, 2 月が多くなっている。

3) 主訴患者の各主訴別内訳 (表 2)

主訴としてとりあげたものは表 2 に示す通りである。腫脹には増殖、疼痛には咬合痛を含め、歯肉退縮、歯の挺出、除石希望及び歯槽膿漏と言われ来院したという例や定期診査等はすべて「その他」として処理した。各年

度を通じて、動揺、出血、腫脹、疼痛の 4 主訴が主要なものであり、これらで全体の 60% 以上を占めている。

これらの比率の経年的変化は図 2 の如くで、腫脹は減少、疼痛は増加の傾向にある。また、わずかではあるが、口臭、咀嚼障害を主訴とする患者も漸次増加の傾向にある。

4) 主訴患者の年齢構成と男女の比較 (表 3)

表 2 主訴別患者数と比率

主 訴		年 度		42		43		44		45	
				人	%	人	%	人	%	人	%
動	揺			103	18.4	103	18.7	63	12.6	84	17.4
腫	脹			102	18.2	106	19.0	90	18.0	68	14.1
出	血			76	13.5	58	10.5	66	12.2	64	13.3
疼	痛			86	15.2	79	14.5	87	17.4	100	20.7
排	膿			38	6.7	74	8.5	19	3.8	27	5.6
口	臭			12	2.1	16	2.9	16	3.2	22	4.6
咀	嚼	障	害	2	0.4	8	1.4	8	1.6	18	3.7
知	覚	過	敏	19	3.4	42	7.6	38	7.6	24	5.0
不	快	感		31	5.5	24	4.3	30	6.0	18	3.7
そ	の	他		90	16.1	69	12.5	84	16.8	58	12.0

表 3 主訴患者の年齢構成と男女比 (4 年間)

主 訴 患 者		年 齢	1—20	21—30	31—40	41—50	51—60	61—	計
			224	544	541	381	266	144	2094
	男		61	208	250	195	150	95	959
	女		163	336	291	186	110	49	1135

表 4 年齢層における主訴の頻度 (4 年間)

主 訴 年 齢	動 揺	腫 脹	出 血	疼 痛	排 膿	口 臭	阻 障 嚼 害	知 覚 過 敏	不快感	その他	計
1—20	人 6 %	55	41	32	15	12	1	9	11	42	224
	2.7	24.6	18.3	14.3	6.7	5.4	0.4	4.0	4.9	18.8	100
21—30	29	68	110	81	41	13	6	44	39	113	544
	5.3	12.5	20.2	14.9	7.5	2.4	1.1	8.1	7.2	20.8	100
31—40	64	115	60	93	46	21	3	35	23	81	541
	11.8	21.3	11.1	17.2	8.5	3.9	0.6	6.5	4.3	15.0	100
41—50	100	69	33	78	17	8	7	17	13	39	381
	26.2	18.1	8.7	20.5	4.5	2.1	1.8	4.5	3.4	10.2	100
51—60	97	35	11	44	9	10	15	10	12	17	260
	37.3	13.5	4.2	16.9	3.5	3.8	5.7	3.8	4.6	6.5	100
61—	57	23	9	24	3	2	4	8	5	9	144
	39.6	16.0	6.3	16.7	2.1	1.4	2.8	5.6	3.5	6.3	100

表5 主訴からみた患者の年齢的分布

(4年間)

主 訴		年 齢	1—20	21—30	31—40	41—50	51—60	61—	計
			(%)						
動	揺		1.7	8.2	18.1	28.3	27.5	16.1	100
腫	脹		15.0	18.6	31.3	18.9	9.6	6.3	100
出	血		15.5	41.7	22.7	12.5	4.2	3.4	100
疼	痛		9.1	23.0	26.4	22.2	12.5	6.8	100
排	膿		11.5	31.3	35.1	13.0	6.9	2.3	100
口	臭		18.2	19.7	31.8	12.1	15.2	3.0	100
咀 嚼 障 害			2.8	16.7	8.3	19.4	41.7	11.1	100
知 覚 過 敏			7.3	38.5	28.5	13.8	8.1	6.5	100
不 快 感			10.7	37.9	22.3	12.6	11.7	4.9	100
そ の 他			13.9	37.5	29.9	12.9	5.6	3.0	100

主訴患者は21～30歳、31～40歳に多く分布し、これら両者で全体の50％以上が占められている。次に男女の比較をみると、男性の最も多い年齢層は31～40歳で、女性の最も多いのは21～30歳である。また、41歳以上では男性患者の方が多く、40歳以下では女性患者が多い。

5) 各年齢層における主訴の頻度 (表4)

全般的にみると、20歳以下では腫脹と出血、21～30歳では出血、31～40歳では腫脹、41～50歳では動揺と疼痛、51～60歳および61歳以上では動揺、に高い比率がみられる。

6) 主訴からみた患者の年齢的分布 (表5)

動揺は41～50歳、51～60歳に多く、全体の約55％を占める。腫脹は31～40歳に最も多く、増齢とともに激減する。出血は21～30歳に最も多く、41歳以上で激減する。疼痛は全体に広く分布しているが20歳以下と61歳以上には比較的少ない。排膿は21～30歳、31～40歳に多く全体の約66％を占め、他の年齢層には少ない。また、口臭は31～40歳に多く、咀嚼障害は51～60歳で最も多い。

7) 主訴別にみた各年度の男女比 (図3)

男性に多い主訴は動揺で、女性に多いのは排膿と知覚過敏である。他の主訴に関しては、男女の差は明確でなかった。また、男女の差が経年的に著明な変化を示したのは口臭であり、男性の占める割合が増大している。

8) 年齢別にみた各主訴の男女差 (表6)

動揺はそのピークが男性で51～60歳、女性で41～50歳となっており、31～40歳と60歳以上で男性が著しく女性を上回っている。腫脹は、ピークが男女とも31～40歳であり、30歳以下で女性が男性のほぼ倍となっている。出血は20歳以下で女性に非常に多いがピークは男女とも21～30歳である。疼痛については20歳以下を除いて男女間に大きな差はみられない。排膿は61歳以上を除く各年齢

層で女性にはるかに多い。口臭は30歳以下で女性に多いが、31歳以上では差はほとんどみられない。知覚過敏は、女性では21～30歳と31～40歳に多いが、男性では少なく、年齢による変化も小さい。不快感は21～30歳に多く、女性が男性を大きく上回っているが、他の年齢層では明らかな差はみられない。

図3 主訴別にみた各年度の男女比

表6 年齢別にみた各主訴の男女差

— 4年間総計—

主訴	年齢	人数					
		0—21	21—30	31—40	41—50	51—60	61—
動揺	男	2	15	46	58	63	41
	女	4	14	18	42	34	16
腫脹	男	17	23	53	31	21	21
	女	38	45	62	38	14	11
出血	男	8	48	27	21	6	6
	女	33	63	33	12	5	3
疼痛	男	9	30	39	40	23	14
	女	23	51	54	38	21	10
排膿	男	4	8	14	4	2	3
	女	11	33	32	13	7	0
口臭	男	2	3	12	2	6	0
	女	10	10	9	6	4	2
咀嚼障害	男	0	1	1	3	9	3
	女	1	5	2	4	6	1
知覚過敏	男	2	11	9	7	1	5
	女	7	33	26	10	9	3
不快感	男	2	10	11	9	5	3
	女	9	29	12	4	7	2
その他	男	15	60	38	20	14	8
	女	27	53	43	19	3	1

図4は今回の検索で多かった4主訴について、男女別に各年齢層の占める割合を示したものである。

考 察

う蝕とともに口腔の2大疾患と並び称される歯周疾患は、その罹患率が成人において100%に近いと言われていたにもかかわらず、歯周疾患に関する症状を主訴として来院する患者は、今回の調査においても、本谷らの報告³⁾の8.8~11.4%および市川らの報告⁴⁾の約7.2%とほぼ近い平均8.8%を占めるに過ぎなかった。しかしながら、金田らの報告⁵⁾によると5000例中793例で約15.9%に歯周疾患に関する症状を主訴とするものがあつた。これは地域差とか調査方法に違いがあるためと思われる。また、4年間についてみても減少の傾向にあり、全体的にみるとう蝕とその関連症を主訴とする患者が漸次多くなっていた。このことは近年、口腔衛生思想の向上がみら

図4 年齢別男女別にみた主訴の分布

れるとはいえ、歯周疾患は当地方においては病院の門戸をくぐりにくい疾患であることには従来と変りがないように推測された。

主訴患者の中では女性の占める割合が大きい、男女別に新来患者中の主訴患者の比率をみると、男性の比率が0.2~1.0%女性を上回っていた。このことから男女間に多少の差があることも推測されるが、我々の資料から歯周疾患が男性に発現しやすいとか、あるいは男性の方が歯周疾患に対する認識が高いということは確定づけられなかった。

月別主訴患者数は前述の如く6, 9, 1, 2月に多く、一方一般新来患者の多い月は7, 8, 1, 3月であり、1月を除いて両者間に一致はみられなかった。7, 8, 1, 3月に一般新来患者が増加するのは、これらの月が学童の休暇や比較的農業に時間をとられない時期にあたることによると考えられる。しかしながら、主訴患者の多い月でも6, 9月は農業に従事する時間の比較的多い時期であり、歯周疾患の発現と季節との間に多少の関連があることも推測されるが、今回の資料のみからそれを決定することは難しかった。

各主訴の占める比率から、動揺、腫脹、疼痛、出血の4主訴が主要なものであり、全主訴患者の60%以上を占めていた。これは今川らの調査⁶⁾に近い数値である。また、彼らの調査結果では出血が最も多く、次いで動揺、腫脹、排膿、口臭という順になっているが、これに比較して我々の調査では疼痛が非常に高く、逆に出血、排膿、口臭などの占める割合が小さかった。このような両調査間の差はその調査方法にも違いがあるとはいえ、調査地域による口腔衛生思想の差などにもよるものと考えられる。すなわち、当地方における歯周疾患患者は出血、排膿、口臭などの症状を主訴として受診することよりも、更に症状が進行してからや、あるいは疼痛が生じ

てから受診することが多いためと思われる。

各主訴の4年間の変化についてみると、腫脹に減少、口臭、咀嚼障害に増加の傾向がみられるものの、疼痛も同時に増加していることから、口腔衛生思想や予防歯科的思想の向上が歯周疾患の分野であったという明らかな結論は得られなかった。しかしながら、口臭に多少の増加がみられたことは今後の検索に何らかの期待を抱かせるようにも感じられた。

主訴患者の年齢構成をみると、患者は21～40歳に最も多く分布しているが、我々は一般新来患者の年齢構成について詳細な調査は行っていないため、この年齢層に歯周疾患患者が多いと直接決めるわけにはいかない。しかしながら、本谷らの調査^{8,9)}を参考とし、各年齢層における今回の主訴患者の一般新来患者に占める割合をみると最も高いのは41～50歳であり、急激に増加するのは31～40歳からであった。今川ら⁷⁾は辺縁性歯周炎は20歳前後から急激に増加すると述べているが、我々の調査で31～40歳に増加がみられたことは、症状がある程度進行した時点で受診するためと推測された。

年齢別に主訴の分布をみると20歳以下では腫脹、21～30歳では出血、31～40歳では腫脹、41～50歳では動揺と疼痛、51歳以上では動揺となっており、増齢とともに、歯周疾患の進行した症状が主訴となっていることが判明した。また20歳以下の腫脹は歯肉炎^{8,9)}、21～30歳の出血は歯肉炎と辺縁性歯周炎^{5,9)}、31～40歳の腫脹および41歳以上の動揺は辺縁性歯周炎とそれに伴う歯槽骨の吸収、破壊によるとみられる。

主訴別にみた患者の年齢的分布では、出血が21～30歳、腫脹が31～40歳、動揺が41～60歳に最も多く、疼痛は21～50歳と広く分布している。これにより炎症症状のみを主訴とするのは大体40歳頃までであり、それ以降は歯槽骨の破壊による症状を主訴とする患者が多くなるという傾向が得られた。

次に各主訴について男女差をみると、男性に著しく多いのは動揺で、女性に多いのは排膿、知覚過敏である。これは男性では腫脹、出血などよりも、歯に動揺あるいは咀嚼障害が生じた進んだ状態で受診するものが多いためと思われる。また、女性に排膿と知覚過敏が多いのは感覚面、審美面に、より鋭敏であることや、時間的に余裕があることも関連しているように考えられる。

主訴患者の年齢構成を性別で比較してみると、男性主訴患者の最も多いのは31～40歳で、女性は21～30歳に最も多い。このような傾向は藤岡らの抜歯に関する報告¹⁰⁾にもみられる。これは、主訴となる症状の発現が、男女

間でそれぞれ差があることによるが、ほかにまた歯科受診に対する地域の社会的条件にもある程度関連しているようにも考えられる。

今回の調査は来院の動機、すなわち主訴が直接歯周疾患に関連する症状を有する症例を抽出したものである。それ以外の動機で来院する症例においても治療を要する歯周疾患例が数多く存在することはいうまでもない。最後に、歯周疾患治療面で効果を期待するためには、主訴からでは判定し得ないような患者についてもその歯周疾患の実態を把握する必要があることを強調したい。

結 論

我々は主訴から当地方の歯周疾患患者の実態を把握するため、昭和42年度から45年度までの4年間の外来患者の記録から調査を行なった結果、次の結論を得た。

1. 歯科外来に受診する患者のうち、その動機が歯周疾患にあると思われるものは42年度で9.6%、43年度で9.0%、44年度で8.6%、45年度で7.8%であった。

2. 主訴患者の新来患者に対する男女別比率は男性の方が多い傾向にあった。しかし、主訴患者中の男女比では女性が平均約54.5%と男性を上回っていた。

3. 主訴患者は6, 9, 1, 2月に多かったが、季節との関連はとくに明らかには出来なかった。

4. 主訴としては動揺、腫脹、出血、疼痛が主要なものであり、これら4主訴が全体の60%以上を占めていた。

5. 各主訴の年齢別分布では、出血が21～30歳、腫脹は31～40歳、動揺は41歳以上に多いという傾向がみられ、疼痛は21～50歳に広く分布していた。

6. 各主訴の男女差で明らかに性差のみられたのは動揺(男性)と排膿・知覚過敏(女性)であり、ほかはとくに差がなかった。

7. 主訴患者は21～40歳に最も多く全体の半数以上を占めた。男女別にみると女性のピークは21～30歳であり、男性は31～40歳であった。

稿を終るにあたって御校閱を賜った上野和之助教授に衷心より感謝の意を表すると共に教室の各員の御協力に對して厚く感謝致します。なお本論文の要旨は昭和46年9月25日、第14回日本歯周病学会総会において発表した。

文 献

- 1) 今川与曹ら：臨床歯周病学，東京，1968，医歯薬，P 209—210。

- 2) 本谷昭ら：岩手医大歯科外来患者の実態 について (第1報), 日保誌, 6(2): 150—156, 1964.
- 3) 本谷昭ら：岩手医大歯科外来患者の口腔疾患の実態 について (第2報), 日保誌, 8(1): 116—122, 1965.
- 4) 市川信七ら：主訴を対象とした歯科外来患者の臨床 統計的観察, 歯科学報, 65: 144—152, 1965.
- 5) 金田敏郎ら：口腔出血の臨床的観察, 第1報, 歯肉 出血 (歯肉炎・歯槽膿漏症) 日科誌, 13(1): 10—16, 1964.
- 6) 今川与曹：私の歯周病学教育をかえりみて, 歯界展 望, 31(6): 968—988, 1968.
- 7) 今川与曹ら：臨床歯周病学, 東京, 1968, 医歯薬, P43.
- 8) Massler, M.: Periodontal Disease in Children. Int. dent. J., 8: 323, 1958.
- 9) Marshall-Day, et al.: Periodontal Disease, Preva- lence and Incidence. J. Periodont., 25: 185, 1955.
- 10) 藤岡幸雄ら：抜歯に関する臨床的研究, 日科誌, 16 (4): 452—467, 1967.